



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

CITATION:

雜報. 天界 1928, 9(93): 74-78

ISSUE DATE:

1928-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161349>

RIGHT:

雑 報

火星が一恒星を掩蔽する

普通「掩蔽」に言へば、月が恒星を掩ひかくす現象であるが、稀には遊星が月のために掩蔽されることもある。去る八月十日のは火星が月に掩はれた例であつた。

しかるに、月でなくて、一遊星が恒星を掩ひかくす現象も無いではない。尤も之れは極めて稀なことで、又、豫報も可なり困難なものであるが、——此の珍しい現象の一つが今年の年末に見える。時日は即ち来る十二月三十一日午後八時過ぎであつて、ボン調査 (B.D.) +26°942 ゐいふ九等星が火星にかくされるのである。詳しい時刻は

地 名	潜 入		出 現	
	時 刻	位 置 角	時 刻	位 置 角
東 京	午後8時17分	280°	午後8時35分	80°
京 都	8 18	278	8 36	82
倉 敷	8 18.5	278	8 37	83
鹿 兒 島	8 19	277	8 37	84
支那香港	7 22	272	7 41	90

火星はうし座東部にあつて、日没の頃既に東天に上つてゐるから、観測には好都合である。研究者は成るべく高倍率の望遠鏡を使用するが好い。少なくとも300倍以上、成るべくは500倍以上が好い。

観測すべき事は、恒星が火星の背後にかくれたり、現はれたりする精密な時刻。それから、潜入や出現の時に恒星の光度が變つたり、色が變つたりするのを精細に觀察するこゝである。此等の観測は火星の位置を決定し、又、火星の雰圍氣の研究上非常に價値多いものである。

長週期變光星のハーブード目錄

米國スタンフォード大學のタウンリー S.D. Townley 教授が新しく變光星

の目録を作製する意志を發表したのは1923年の秋の A.A.S 總會に於いてであつたが、其の後、同教授はハーバード大學のミス・カノン A.J. Cannon やカンベル Leon Campbell 氏の援助を得て、先づ長週期變光星の目録作製を急ぎ、最近之れを完成して、ハーバード大學天文臺年報第79卷第3部に之れを發表した。吾々は此れを去る九月26日に入手した。見るに、四つ切り版49ページのものであつて、中には總計1760個の變光星について、

(第1行)	ハーバード式の符號	南緯の數字下には下線を施す
(第2行)	星の名(アルゲランダー式)	星座は三字の略號
(第3行)	Durchmusterung 番號	南緯 23°-62° 間はコルトバ番號・ 其れより北はボン番號・ 南はケープ寫眞番號・
(第4行)	赤經(分點1925年頭)	1 分時の分數まで
(第5行)	赤緯(ク)	角度 1' まで
(第6行)	銀經	} 星圖で目測、分點は1925年頭
(第7行)	銀緯	
(第8行)	極大光度(平均)	} 寫眞光度には下線を施す
(第9行)	極小光度(ク)	
(第10行)	變光週期	單位は一日
(第11行)	元期	ユリウス通日で表はす
(第12行)	増光日數 (M-m)	
(第13行)	スペクトル	變動の範圍も示す

卷末には詳細なる補遺事項を附し、殊にスペクトル、視線速度、固有運動、視差等の記載がある。

目録も補遺も共に全部石板刷りしたのは、活版刷りの誤字を恐れた結果であつて、作製者の注意深いことを表はしてゐる。

此の目録の中の1760星について、シャブレイ教授が卷頭緒言に述べてゐる所では、約59%は週期の決定されたものであり、又、33%はスペクトルの知れてゐるものであり、又、約27%は M-m の決定されたものである。尙ほ、全體の中で、約50星は模型的な長週期變光星では無く、むしろ、ふたごの U 星や、かんむりの R 星や、うしの RV 星の類に屬するものを含んでゐる。——ここに此等の不規則星の定義をして第195頁に記してゐる所では：—

「ふたご座 U 星型の變光星」は、普通は 1 ヶ月以上の期間微光で、可なり一定の極小光輝にあるが、時として急激に極大光輝となり、又、或は徐々に極大光輝へ上る。變光範圍は多くは 4 級乃至 5 級である。ふたごの U 星は極大光の期間の長いものと短いものが交代するし、ぎよしやの SS 星は同様な傾向を見せることもあるけれど、必ずしも常に左様でない。はくでうの SS 星は此の型の星の中で最も光りの大きいものであつて、ふたごの U 星や、ぎよしやの SS 星の有つ總ての特徴を有つと共に、尙、自己獨特の性質もある。

「かんむり座 R 星型の變光星」は、普通、幾ヶ月もの間、時には何年にもわたつて、光は殆んど一定の明るさを保ち、只僅かに變動するに過ぎないが、突然として光輝が下降して、二三週間後には極小光輝として 8—9 等級にも達する。その後、光度が元の明るさに回復するには數ヶ月を費し、其の間に著しい不規則變動を示す。

「うし座 RV 星型の變光星」は、明るい極小光輝と暗い極小光輝が交代するのが常で、其の順序が數年後に入れ代はることもある。又、極大光輝も時々變動する。光度曲線は時々こと座 β 星のやうにもなり、又はセファイ座 δ 星のやうにもなる。變光週期は、同種の極小光輝がくりかへられる期間を言ふのであるが、普通之れは 50 日以上である。

「天文航空學」

「天文航空學」は最近年に天文學の一部門として開かれたものである。ちようご航海者が天文觀測によつて船を進行させるのと同様に、遠距離を行く現代の航空家たちが飛行機の上で星を見ながら其の進路むつかしい間を定めやうとする必要から生れたものであるが、之れは天文航海術以上に題である。近頃、フランス天文學會が Robert Esnault-Peltiere 及び André Hirsch 兩氏の寄附金によつて「Rep-Hirsch 賞金」といふものを設け、1928 年から 1930 年まで毎年 5000 フランづゝを懸けて此の新しい學問の進歩に貢獻する人々の努力に報るやうといふことになつた。此の賞金の委員には Ferrié 將軍、J. Perrin 教授、C. Fabryié 教授、H. Deslandres 教授等がある。去る四月から所澤の飛行學校でも天文學の講義を始めた。

東京天文臺で發された小遊星の一覽表

今まで發表されたものは下の通り.

器械は口径20センチ, 焦點距離 127 センチのブラシーヤ製寫眞望遠鏡が
用ゐられる.

番號と名	東京番號	假 名	光度	發見年時
(498) Tokio	—	1900FF=1902KU	11.2	
(727) Nipponia	—	1900FE=1908CV=1912NT	12.7	1900年 3 月 6 日
(804) Hispania	—	1903NE=1915WT	11.2	1903年11月26日
—	Tokyo 1	1927BD	13	1927年 1 月23日
—	Tokyo 2	1927BE	12.5	} 1927年 1 月26日
—	Tokyo 3	1927BF	13	
—	Tokyo 4	1927BG	13.5	
—	Tokyo 5	1927CR	11.5	
—	Tokyo 6	1927BH		1927年 1 月26日
—	Tokyo 7	1927WA	12.3	} 1927年11月17日
—	Tokyo 8	1927WB	12.6	
—	Tokyo 9	1927WC	13.1	
—	Tokyo 10	1926XC	13	1926年12月 4 日
—	Tokyo 11	1926YA	12.5	1926年12月26日
—	Tokyo 12	1928DG	13	1928年 2 月20日
(901) Brunsia	Tokyo 13		13.5	1828年 3 月10日
—	Tokyo 14	1926XD	13	1926年12月 4 日
(1018) —	Tokyo 15	1926VK=1924QM	12.4	1926年

新 天 文 臺

南カロライ大學 米國サウス・カロライナ州コロンビア市にある州立大學
では去る五月二十五日新しく天文臺を創立した. 此の天文臺はシーベルス
E. G. Seibels の寄附であつて, 尙ほ, 「15吋」の望遠鏡はハンショウ J. W.
Hanshaw 氏の寄贈品である.

キリアムス天文臺 米國メリーランド州フレデリク市のフト學院は三萬
ドルの寄附金によつて天文臺を新設した, 之れは去る1923年にミス・井リ
アムス Janet Williams が亡父の記念として寄附したものである, 器械は「8吋」

のクラーク製の赤道儀を主とし、尙ほスペクトル實驗室、講義室、屋上望臺などを備へてゐる。

來年の日食に觀測遠征の計畫

來る1929年五月九日には南洋に於いて見える皆既日蝕がある。之れについて、早くも去る1926年の秋、東京で開かれた汎太平洋會議に於いて、Manila から來た Selga 師が Philippine 諸島中に觀測の好適地がある事を報告し、最近其の報告文は Popular Astronomy 第35卷第214頁に載せられた。又、Astronomische Nachrichten 第5516號には Brändli 氏が Malay 半島に於ける觀測の好適地を紹介してゐる。

此の日蝕を觀測するため、我が京都帝國大學は約15000圓の豫算を計上して準備計畫を進め、東京天文臺も亦ほ同様の計畫を進めてゐる由。又、「學術研究會議」は此の兩大學の觀測計畫を熱心に支持し、去る四月の例會には田中館副議長等の賛成演説があつた由。

人 事 消 息

木村榮博士 さきに和蘭ライデンに於ける國際天文同盟第3回總會に出席された緯度觀測所長木村榮博士は去る十月二十六日米國を経て無事歸朝。十一月の御即位御大典に列席されたが、其の期間中、京都東一條の山本一清氏宅に宿泊された。

平山 信博士 木村博士と共にライデン會議に列席された同氏は目下尙ほ外遊中で、多分年末に歸朝される筈。従つて御大典には參列されなかつた。

A.A. マイケルソン博士 シカゴ大學のマイケルソン教授は、今年も亦夏の間、井ルソン山に於いて光線の速度を觀測中であつたが、十月初めには其れを終つて、シカゴへ歸られた。

荒木俊馬助教授 今回文部省在外研究員を命ぜられ、多分來る一月頃、ドイツへ向け出發せられる由。

上田 穰助教授 同氏も亦文部省研究員として、多分來年三月頃出發、米國へ向けれるこの噂。